

我々が今用ひてゐる漢字は、日本語を表すために、言はば改造したものであるから、中国で用ひられてゐる漢字とは一応別の物である、と考へた方が間違ひが少ない。

我々が住んでゐるこの島国は、あらゆる点で、大陸の中国とは著しい違ひがあるから、当然、物の見方、考へ方にも大きな違ひがあり、それが言葉や文字にも影響してゐるからである。

例へば、“うらむ”といふ気持を表した漢字は実に多い。「その時はショックを感ずるほどでも後に残らない“一時的なうらみ”は“憾”と言ひ、「いつまでも“根にもつうらみ”」は“恨”と言ふ。

「心が<sup>しほ</sup>固れてしまふやうなうらみ」を“惆”と言ひ、「思ひ切れずに“長く残るうらみ”」を“悵”<sup>チヤウ</sup>と言ひ、「内にこもって発散せず、時々思ひ出してはうらむうらみ」を“愠”と言ふ。

“怨”は、「人の仕打ちに対して、うらみには思ふものの、直接には仕返す事も出来ず、婉曲に皮肉などを言つて、僅かに晴らしてゐる“うらみ”のこと」を言ふ。

その他、「<sup>たい</sup>對抗的意識に基くうらみ」を表した“懟”など、まだまだ、いろいろな“うらみ”があるが、日本語には“うらみ”の一語があるだけであ

る。日本人は元来、うらむことをしない民族だから、中国人のやうな細かい表現は要らなかつたのである。

だから、“うらむ”といふ字を漢字で書くのは本当は難しいのである。「恨むよ」とあっさり言つたつもりでも、この“恨み”は、「一生忘れないぞ。必ず仕返ししてやるからな」といふ“うらみ”になってしまう。

こんな訳で、太安萬侶は「詞、心に及ばず」と言つたのである。かういふ場合は、「事の趣、更に長し」といふ事になつても“うらむ”とかなで書いた方がよい」といふのが安萬侶の考へであつたやうである。

“あはれ”などの言葉に至つては、とても漢字で表現することは出来ない。これは、日本人特有の感情を表した言葉であるから、どうしても“あはれ”と、かなで書く必要があると思ふ。

さて、このやうな言葉や文字に違ひのあるのは、誰でも当然だと思ふが、物の名前の表した漢字でも、日本と中国とでは違ふものが多いのである。

“桜”<sup>さくら</sup>“椿”<sup>つばき</sup>“柊”<sup>ひいらぎ</sup>“榎”<sup>えのき</sup>“柏”<sup>かしわ</sup>“楓”<sup>かえで</sup>“桂”<sup>かつら</sup>“楠”<sup>くすのき</sup>“朴”<sup>ほほ</sup>“檀”<sup>まゆみ</sup>などの漢字は、日本と中国とでは別物なのである。“桜”は、中国には存在しない、日本の“さくら”を表すために、“桜”といふ漢字を借りて表したものである。

“朴”は、日本では“ほほのき”の意味に使ふが、中国では“えのき”の事である。日本の“榎”といふ字は、中国では、日本の“きささげ”の

## 日本語の再発見

木を表した字である。

“楓”は、“<sup>ふうげうやほく</sup>楓橋夜泊”の詩の、“江楓の漁火”といふ言葉で親しまれてゐる“楓”だが、日本の“かへで”とは違った木である。翼の着いた実が成り、風に吹かれてこれが見事に飛ぶので“楓”と言ふ。

かういふ訳であるから、中国の漢字は中国の言葉を表した文字であり、日本の漢字は日本の言葉を表した文字であつて、同じ字形であつて、同じ発音をしてゐたとしても、別の文字である、と割切つて考へた方がよい、と思ふのである。